

カストリ社事件

坂口安吾

青空文庫

カストリ雑誌など、云つて、天下は挙げて軽蔑するけれども、これを一冊つくるんだつて、容易じやないよ。まア、社長の顔を見てごらんさい。やつれていますよ。これは、キヌギヌの疲れ、などという粹筋のものではない。生活難です。

「オイ、居ると云つちや、いかん。居ると云つちや、いかん」

これが社長の口癖であつた。彼は必死なのである。

なんとかして、カストリ社の入口に受附をつくらねばならぬ。

入口の扉をあける。ビルの一室を占めているカストリ社の全景は、ただちに見晴らしではないか。これは怪けしからん。

「ねえ、先生、ウアツ、怪しからん。生命にかかわる。わが社は、

受附をつくらねばならぬ」

「なにイ」

このカストリ社は、社長を先生とよぶ。なぜなら、彼は文士である。文士であつた。粹であつた。通であつた。粹にして、通なるものが、カストリとは、何事であるか。世の終りだ。

文藝春秋とか、鎌倉文庫とか、文士が社長の雑誌社は、例がある。然し、彼らは、カストリ雑誌ではなく、思想高遠、威名天下にあまねく、それらの偉大なる社に於ては、チンピラ記者といえども、カストリの如きは、飲まぬ。ワア、ひでえ。ひとり、わが社に於ては。

悲しい哉、カストリ社は、受附をつくるオカネもないのであつ

た。

「ねえ、先生、受附、なんとかして下さいよ。文士だの、漫画家だのつて、まア、うるせえなア。顔さえ見りや、原稿料、よこせえ、ワア、ひでえ。カストリ横丁のオヤジまで、借金サイソクに來やがんだもの。わが社に於ては、扉にカギをかけ、密室に於て事務をとる。そうも、いかねエだろうな。ねえ、先生」

「なにイ」

先生に話しかけても、ムダなのだ。先生は、世の雑音に対しては、なにイ、と一言答えるにすぎないのである。悲しいことを言うな。受附をつくりたいのは、先生自身の必死の願望であるぞ。なにイ。

ところがさ。はからずも、二十万円の現金が、ころがりこんできた。編輯長の花田一郎が、もらつてきたのである。

十年前の花田一郎は、浅草のインチキ・レビューの俳優であつた。芸はヘタだ。お客には受けなかつたが、仲間には、受けた。なぜなら、女の肌のむせかえるような世界にすんで、この男は、女なぞには、目もくれなかつた。彼は男が好きなのである。けれども、オカマヤの如き下品なるものではない。およそ彼は露骨なるものを、にくむ。よつて彼は、あくまで、純情であり、義理堅く、したがつて、トンマであつた。

浅草時代、ちよツとばかり世話になつた知り合いのアンチャンが、今では親分になつている。テキヤなどとは昔の言葉で、今で

は土建業、ナント力組、即ち、紳士である。

その車組の善八親分に街でバツタリ会つて、茶のみ話にカストリ社の窮状をもらしたところ、イクラありや、いゝんだ、と、事もなげに言つたものだ。あげくに、ポンと二十万、小切手をくれた。元来小心の花田が、犯人の如く、心細く窓口に待つところへ、ホンモノの二十万円が事もなげにつき重ねられ、イヤ、驚いたネ、そうですとも、二十万円と申せば、帝銀事件の先生よりも三万円も余計じゃないか。何が何だか、分りやしない。夢心持で、カストリ社へかつぎこんだ。

「なにイ」

と、一言、うなつたきり、社長の先生、言葉もなく、身動きも

ない。

心に悩むところ大なる人物は、打見たところ、閑静で、全然、怠け者のようである。だから、社長の先生も、全然、怠け者のようであつた。

冬は机の下へ電気コンロをおき、そこへ足をのぼし、両手をクビの後へくんで、一日天井をボンヤリ見ている。春暖の候となるや、靴をぬぎ、両足を机の上へつきのぼして、両手をクビの後にくんで、ボンヤリ天井をにらんでいる。夏になると、靴下もぬぎ、机の上へカナダライに水をいれて、その中へ足を突ツこんで、両手を後クビにくんで、天井をにらんでいる。

頃しも、春であつた。机へ乗つけた社長の先生の両足にならん

で、二十万円の現金がつみ重ねられている。花田の顔は、泣きだしそうに見えた。たゞ今、帝銀で、かせいで来ました、というようであった。それ以外に、どう考えれば、こんな奇蹟がありうるのか。

社長の先生も、あきらめきつた顔をして、泥亀の要領で、足を机の下へひっこめた。

「もらったんです。つまり、くれたんですな」

と、花田は、切ない顔つきで、逐一事情を説明した。

「なぜ、くれたんだ」

「それが、その、わからねえや。つまり、くれたんですな。オト

コ、か、ねえ」

「フーム。オトコ。そうか。オトコ、か。わかった」

と、叫んだが、わかったような顔ではない。

ともかく、金曜日、車親分が社へくるというから、それを待つことにして、二十万円は、見る見る借金を払い消え失せてしまったのである。



金曜日に、車氏は自家用車を横づけに、秘書をしたがえて、現れた。秘書の肩幅は、一メートルぐらいあった。

社長の先生と握手して、

「御高名はうけたまわっております」

と、如才のないこと云つて、ズカ／＼と奥へすゝんで、社長の椅子へドカンと腰かけたが、ヒョイと立つて、

「そうだ。紹介していたゞきましよう」

「こちらは、車組社長、車善八氏です」

と、花田が一同に披露した。

「フム。その隅、しツかり、こつちを、向かんか。動作が、いかんぞ。ハキハキせんか。貴様ら、なツとらんぞ。仕事は遊びじゃないんだ。貴様ら、女優の海水着写真をうつす時だけ、六人も揃つて行くそうじゃないか。何たることだ。女優の座談会にも、六人そろつて行ったそうだな。ヒイ、フウ、ミイ、……アレ、アレ、

六人、編輯の全員じゃないか。何たることだ。オイ、何たることだ」

「ワーツ。弱った。これは、こまった。それは、その、そういう意味じゃないんで、それは、その、あの、茶のみ話に、ただ、つまり、ゴシツプ的に、そんなことを申し上げたゞけでして」

と、花田が苦悩に身もだえて、頭をかゝえて、腰をくねらせて、懇願したが、

「なにイ。それで、わかるじゃないか。いゝか。仕事は遊びではないぞ。全力で、やれ。コラ、娘、フム、お前だな、お前は校正をやりながら、あらア、唐つて、中国のことねえ、と叫んだそうじゃないか。お前、いくつに、なるんだ。その齡をして、唐は中

国ねエ、何たることだ。男と一緒に、カストリをのみ、ダンスに
でかける。あれは、いけねえぞオ。ヤイ、コラ、男女同権を、は
きちがえているぞ。そもそも、お前ら、チンピラのくせにだなア、
この敗戦日本に於てだなア、酒をのみ、ダンスを踊る、それはな
ア、オレは酒をのみ、ダンスも踊るぞ。大いに踊るぞ。オレはだ
なア、全力をつくして仕事に打ちこみ、かつ、莫大なるオカネを
もうける。もうける故に、それ故にだぞ、オレは酒をのみ、ダン
スを踊る。しかるに、貴様らは、なんだ。遊んでおる、怠けてお
る。仕事をしとらん。もうけて、おらんじやないか。ヤイ、コラ、
オレが気合いをかけてやる。今後、仕事を怠ける奴は、即座にク
ビにするから、そう思え。本日、社告を言い渡す。朝八時出勤、

一分、おくれても、いかんぞ」

一同を睨みまわして、

「オレは本日、これより、国際親善のパーティーに行く。国際親善は、オレのモットーだ。これだぞ。これでなくちゃ、いかんぞ、日本は、外務省などに、まかして、おけん。オレは民間外務大臣みたいなものだぞ。国際親善の実をあげておる。いゝか。これを見よ。オレはだなア、酒をのみつゝも、国際親善、この大きな目的を果しつゝ飲んでいるぞ。しかるに、なんだ、貴様らは。貴様らには、文化という重大な任務が課せられておる。その責任を果すのは、本懐じゃないか。国際親善、及び、文化。実に、これは、重大であるぞ。不肖、車善八、もうけたる大金を快く投げだして、

文化国家建設に一身を挺す。これだけの人物は、日本に、おらんぞ。主義のため、国家のために、一身をギセイにしておるぞ。いゝか。わかつたか。貴様らのイノチは、オレが、もらったぞ」

「だつてさ、そりや、いけねえなア。困っちゃったな。オレは、イノチは、やられねえなア。なア、オイ、だつて、ひとつしか、ねえもの、困るよ、なア」

と、大きな声で、悲鳴をあげたのは、土井片彦という自称天才詩人、二十六歳である。時と場所を心得ない。花田一郎は、目まいのため、逆上の気味で、

「アゝ、いけねえ。ホゝ、助けてくれ。ウム、もつともだ。ホホホ、オレは、悲しい。アゝ、ちよツと、木村、オレの心臓が、ア

、いけねえ、ワア、倒れる」

肩幅一メートルの秘書氏がズカズカと歩いて行つて、天才詩人氏に横ビンタを五ツ六ツくらわせた。土井片彦のお喋りは、なぐられて、よろけたぐらいで、とまるものじゃない。

「いたいよ。なぐるのは、卑怯じゃないか。オレ、兵隊の時も、なぐられて、まったく、よく、なぐられるよ。痛えな。よせよ。

まったく、然し、イノチなんて、オレはアノコにも、やらねえか
らな。だからさ、イノチなんて、アノコに見せても、カツコウが
よくねえし、オレはキリストじゃねえから、元々、イノチなんか、
ねえんだもの。だから、オレは、天才なんだ。オレが天才だツて
ことを、知らねえんだから、オイ、痛いよ、よせよ、もし、ぶた

れて、オレの頭が悪くなったら、世界の損失じゃねえかと思うんだ」

国際親善の大紳士にも、こういう怪漢は、はじめてのツキアイらしく、相当に面くらった御様子である。紳士が失つてはならぬものは威厳である。車氏は悠然と、もう、よろし、秘書を制して、

「お前は、まさか、横丁まで、つきあいたくはねえだろうな」

「つきあいたか、ねえよ。つきあえつたツて、オレ、逃げちやうもの。オトトイの晩も、なア、オレ、逃げちやつたもん。その前
のときさ、オレ、アノコと一しよだもの、逃げちやいけねえし、
あゝいう時は、いけねえよ。たかられちやつてさ、オレ、オカネ

が一文もねえんだもの、アノコが千五百円とられやがんのさ。仕方がねえから、オレ、金歯ぬいて、売ったんだ。変だよ、なア。金歯だって、歯にくつついている限りは、やつぱり、カラダの一部分じゃねえか。だからさ。お前。金歯を売るなんて、やつぱり、身を売ることじゃねえか。つまり、オレ、パンパンやつちやつたと思うんだ。パンパンやつて、アイツに千五百円返してさ、つまらねえじゃないか、ホラ、口んなか、ここんときさ、こゝから、貞操がなくなっちゃつて、オレ、不愉快なんだ。バカにしてやるよ、なア、オイ」

「お前は、なんて、名前だ」

「オレは、詩人だけど、知らねえかな、知らねえだろうな、知っ

てりや、偉いよ。土井片彦ツて名前は、殆ど、人が知らねえからな。然し、オレだつて、持ちこみ原稿ばかりじゃねえもの、頼まれた原稿だつて、書いてるよ。なア。原稿料だつて、二千円、もらつた月もあるんだもの、もつとも、半分しか払わねえや、そんなの、ないじゃないか、然し、オレの社も、原稿料の払いが悪いから、オレ、まったく、赤面するよ、なア」

「イヤ、この男は悪気がないんです。一風変つてゐるだけで、なんしろ、心臓まで、右の胸についていて、ツムジが八ツもあつて」
花田が口をいれて、とりなすと、

「オイ、よせよ、はずかしいよ、なア、オイ、とつても、残酷だよ」

顔をあからめて、必死に恨んでいる。

国際親善の大紳士も、直接応待の手段が見つからなかつたようである。そこで、キツと、ひきしまると、

「気を付けえ！」

と、大喝一声。さて、気をつけの一同をジロリと見渡して、

「オレは一週に一度だけ、社へでる。オレの代りに、秘書のこれが、毎日、見廻りにくる。オレだと思え。この部屋の汚さ、暗さは、なんだ。居は心をうつす。明朗でなければ、ならんぞ。第一着手として、部屋の壁を、白く、明るく、塗りかえる。こゝだぞ。オレのやり方は、いつも、そうだ。文化も、国際親善も、この精神でなければならんぞ。貴様らも、オレのような第一人者たる国

際民間使節の下に、文化国家建設の仕事に当る、最も、貴様らの
光栄の至りであるぞ。よし、礼！」

そして、秘書をしたがえて、悠々と出て行つた。



思いよらざることになった。

「花田さん、ひどいわねえ。唐は中国だったなんて、そんなこと、
でも、ひどいわ。ずいぶん、侮辱じゃないの」

「オイ、オイ、スミマセン、アナタ。そんな、個人的な感情問題
じゃないぜ」

と一同を制したのは、一番年の若い、然し、さすがに銀行員上りの、一同の中で一番物の道理の分った堅木という会計係であった。

「カストリ社の運命や、いかに」

「うん、まったくだ。あんな奴に、のさばられちゃ、かなわねえよ、なア。オレは、こんなエロ雑誌はあんまり性に合わねえけど、然し、オレは、詩人だからネ、オレは古くないから、食うためにエロ雑誌をやる、女に生れたら、パンパンやったって、いいんだ。詩をつくりや、いゝじゃねえか。だから、オレがこんなカストリ雑誌の記者であるということは、つまり、パンパンの精神なんだ。でもよ。車組の検閲雑誌は、いけねえよ。いったい、アイツは、

わが社の、何のつもりなんだ」

「つまり、社長のつもりだろうな」

一同は花田をジロリと睨み、社長の先生へ目を転じた。

花田は魂を失い、施す術を失い、たゞもう茫然、ザンキ苦惱、
刑死せるキリストの如くにうなだれている。

社長の先生は、いったん親善使節の紳士に奪取された帰属不明
の椅子にもどつて、靴をぬいで、足を机に乗つけて、両手を後ク
ビにくんで、天井をにらんでいる。

「ウン、やっぱり、なア。今となつては、あんなカツコウしてみ
るより、仕様がねえだろうな。だけどさ、ウチの社長は、あれが
年ガラ年中のカツコウなんだから、こりや、つまり、先天的、没

落者の姿なのかも知れねえなア。二十万円、有りや、いゝんだらう。二十万円ぐらい、オレがだしてやりたいけど、もう、金齒はねえし、もし、みんなが女だったら、オレが命令を下して、そろってパンパンに出動して、二十万円ぐらい、一週間で稼いじやうけど、ママならねえよ、なア。でも、なア、ワツハ、悲しいよ、なア、あの姿、ワツハ、アレ、二十万円ないという姿なんだ、ひでえよ、なア、ワア」

「なにイ」

社長の先生、ジロリと目をむく。それだけである。さすがに、顔色も変らない。

「エツヘツへ。きこえちやったか。気の毒だよ、なア。だけど、

先天的に、どうも、仕方がねえや。問題は、オレは、先天的なんだと思うんだ」

「まさに、片彦の云う通りじゃよ」

と、社長の先生、悠々と、然し、いさゝか、悲痛である。

「要するにだよ。オカネというものがなければ、オレが社長であるという意味はない。しかるにじゃ。オレは今日まで、借金のために奔走これつとめ、辛くもなにがしの借金をカクトクすることによって、この椅子にこうして坐つて、かくの如くに足を机の上のツけていたわけじゃよ。身にあまる苦痛であつたよ。借金は、苦痛じゃよ。それにも拘らず、なに故に、ワガハイがかくの如くに社長であつたかと云えばだな、つまり、自分個人の借金をカク

トクせんとする事は、さらに苦痛である。わが社のために借金をカクトクすることは、いくらか苦痛が少いのだな。そこに於て、即ちワガハイは、苦痛少く借金をする、どっちみち、ワガハイは借金によつて生活せざるを得ん宿命にあるから、マア、左様な事の次第によつて、ワガハイが今日に至るまで社長であつたワケである。ワガハイは社長の椅子にテンタンであり、運命に従順であるから、汝らも、嘆くでないぞ」

「イヤーツ、社長！ 先生！ オレが、もう、ここで、腹を切る。オレは死に場所を探していたんだ。十年前、あの浅草、あの楽屋、君たち知るまいが、舞台裏で、あのジャズが舞台裏じゃ、階段をこう曲りくねつて、這いながら、忍びよる、あれをきゝつゝ、あ

の時から、ワシは、もう、今日、死のう、明日、死のう、と思つていたんだ。あゝ、然し、かゝる大罪を犯し、皆々様を苦しめて、腹を切る。死は易い、然し、罪がせつないんだ。あゝ、ワシは、苦しい」

ギャーツ・ギユウくという声をたてゝ、花田一郎がエビの形となつて泣きふした。

そのとき、カストリ社の扉をあけ、

「ワア、ひでえ。借金とり退治に熊を飼いやがったんじゃ、ねえだろ。オレだつて、原稿料をサイソクする、借金と同じぐれえ、苦しいもんだよ。こつちの気持も、察しやがれ」

と、ブツブツ云つて這入つてきたのは、社長の先生の友達で、

文士の赤木三平という男であつた。

「やア、赤木か。近う、まいれ。今日は、景気よく、原稿料を払つてつかわす」

花田が身も世もあらず、吠え狂っている。三平先生、これを横目にジロリと見て、

「かの男は、齒が痛むのか」

「バカな。あれほど苦しむのは、辜丸炎に限るもんじや。今日は、いさゝか事の次第があつて、彼はこの場に切腹せんとしておる。

同様の事の次第によつて、君にも、景気よく、原稿料を払う。どうしても、本日、使いきつてしまわねばならぬ残金があつてな。

エート、原稿料、赤木三平、一万一千円也、これは多すぎる」

「コレ、コレ、五ヶ月分、たまっているのだぞ」

「そうか。然し、端数は切りすてゝ、一万円、即ち耳をそろえ、あと、一万五千円ほど、残っておるから、これより、宴会をひらく。コレ、花田ウジよ、泣くでないぞ。切腹は、とりやめじや。ワガハイが、ココロよく社長を退く。それだけのことじや。人数が多いから、宴会は、カストリでやる。足がでたら、三平のフトコロに、一万円ある。者共、遠慮致すな」

と、カストリ横丁の一軒を占領して、大宴会を催した。

然し、社長をやめりや、いゝんだ、と云つたつて、そう簡単にやめられるものではない。たつた二十万円で、雑誌を売り渡すよ
うなものだ。じゃア、どうすりや、いゝんだ。カンタンだ。二十

万円、ありや、いゝんだ。

花田は、発頭人であるから、身をきらられる切なさである。顔にはださないが、社長の先生の心のうちも、よく分るのだ。なんとしても、二十万円、ほしい。とても、泥棒の勇氣はないから、あとの道はたゞ一つ。

翌日、彼は土井片彦をよんで、

「一生の願いだ。折入って、たのむ。ワシはこれから、二十万円のカタに、イノチをすてに行くから、立会ってくれ」

「オイ、おどかしちゃ、いけねえや。死なゝくたつて、いゝじやないか。ひでえよ。だいたい、オレは、とても心細くつて、椅子にこうして腰かけているのが、精いっぱいなんだもの。立会人な

んか、できやしないよ」

「オイ、一生の願いだと云つてるじゃないか。たゞ、見とゞけて、後々の証人になつてくれゝば、いゝんだ。そんなことのできるの
は、ともかく、詩人の、君だけなんだ。君には、とにかく、芸術
家の純一な正義と情熱があるんだ」

「ウーン、そうか。そう云われると、なんだか、やらなきや、悪
いみたいじゃないか。困つちやつたよ。なんだか、変だな。オレ
は、然し、戦争のときも、兵隊で、特攻隊はキライだったし、あ
れは、いかんと思うよ。然し、花田氏が死ぬ、オレじゃア、ねえ
んだな。花田氏が死ぬ、見とゞけるのが、オレか。ついでにオレ
が殺されちやア、つまらねえけど、花田氏死す、それをオレが見

ている、面白えのかな。面白くなくちや、つまんねえけど、わからなくなつちやつた。じゃア、仕方がない。オレ、行くことにしようかな。心細くなつちやつたな」

と、二人は肩幅一メートル氏に案内されて、車組社長を訪ねて行つた。



「私がフツツカで、双方の意志を通すことができませず、拝借の二十万円は、使い果してしまいました。すべて、私の責任ですから、社で切腹をと考えましたが、切腹しても、二十万円のカタが

つくわけではありませんから、お詫びに参上致しました。二十万円の代り、突くなり、斬るなり、お気のすむように、存分にやつて下さい」

と云つて、花田一郎は、目をとじた。

小心者で、ちよつと針で突かれても、アツチツチと悲鳴をあげる弱虫であつた。然し、彼は、まったく、覚悟をきめたのである。

悲愴な覚悟だ。

全然余裕がないから、覚悟はヒタムキで、正座して目をとじた姿には、迫力があつた。斬られるのは、痛い、苦しいと語っている。然し、それでも、死なねばならぬと観念している。見方によれば、滑稽でもあつた。

国際使節は、花田一郎の覚悟のほどが、はかりかねて、土井片彦にギロリと一睨み、

「お前もか」

「違うよ。冗談じゃないよ」

片彦は、大いに慌てた。

「オレは来たくなかったけど、立会人に来てくれというから、だから、云わないことじゃないよ。オレは、そもそも、死ぬツてことが、一番キライなんだ。でも、いずれ、死なゝきやならない。これが、変なことなんだな。それでもって、色々、ワケがわからなくなつて、このワケは、いまだに、誰にも分らない。人間の知識は、アサハカですよ」

「つまり、花一はじめ、お前ら、チンピラ記者ども、オレの社長じゃ、イヤだと云うのだな」

「ハア、つまり、そうですね。ですから、私が責任を負います」
「二十万円が、不足か」

花田は、目をとじて、答えない。

すると、片彦が、

「そうだなア、それは、オレも気がつかなかつたな。オレは、どうせ、パンパンだから、金で身売りか、それだったら、考えてみても、いゝかも知れねえな」

「オイ、よけいな口をだすな」

「いゝよ、云つたつて、いゝじゃないか。君の問題とは、また、

別だもの。オレは、パンパン的に、考えてるんだ。然し、現在、出版界の相場で、身売りに十万単位はいけねえと思うな。先に、アネモネ出版が身売りのとき、二百万だか、三百万だか、五百万ぐらいかも知れねえなア。やっぱり、こっちは、高く売るほど、いゝんだから、パンパンも、むつかしいもんだな。わからねえや」

そのとき、国際親善紳士、グイと身をひねって、

「この男を見損うな。この無礼者！」

タタミをグンとふみ、片腕で、カイツパイ、タタミをたゝいた。

「このオレが、貴様らの、カストリ雑誌の、社長に、なりたがつて、いるとも思ふか。貴様ら、天下の車組の社長、車善八を、貴様ら如きチツポケな雑誌の社長に見立てゝ、オレが、そんなも

のに、なると思うか」

「イヤ、社長、そうじゃないです。私は、わが社の社長問題などには毛頭ふれておりません。あなたが、自分から、言われたのです。私は、二十万円のお詫びに、突くなり、斬るなり、お気のすむようにして下さい、と申したゞけです」

花田一郎は蒼白だ。後へは、ひかぬ。死ぬ覚悟である。

いきなり、グアツと、メリケン。花田のからだは、ふツとんだ。ぶツ倒れ、動かない。鼻血があふれてきた。片彦は慌て、二三歩うしろへ忽ち、逃げのびて、

「オレは、違うですよ。単なる、立会人だからね。オレは、しかし、終戦以来、とても、運が悪くツて、こまツちやうよ。オレ、

先日、スシ屋で、ほかの男と間違えて、ケンカをうられて、違いますよ、オレじゃないよ、と云ってるのに、ポカポカなぐられちやつて、運が、わりいよ。オレのオフクロ、子供んときから、成田のオマモリなんか持たせやがつて、それが割れちやつたりして、つまらねえことまで、ネザメが悪くつて、どうも、気分がよくねえよ。人を、まちがえちや、いけねえなア。心細く、なつちやうよ」

三分か、五分ぐらい、たった。国際親善紳士は、だまって、睨みつけている。

花田は、ぶつ倒れて、鼻血をさかんに吹きあげて、依然、目をとじたまゝ、微動もしない。死んだのか、生きているのか、意識

があるのか、ないのか、分らない。

国際親善紳士が、スツクと立ち上った。片彦はバネ仕掛にとび上って、逃げ腰となつて、

「いけねえな。心臓が、弱くなるよ。オレは、全然、ちがうんだから、まちがえちや、いけねえな。危ぶねえな。オツト、いけねえ」

「つまみだせ」

秘書に云い残して、大紳士は立ち去つた。

「ハア、ボクが、つまみだします」

片彦は肩幅一メートル氏の顔をうかゞいなながら、

「たのみます。つまみだしても、いゝですか。死んでるのかな。

いいですか、ゆさぶツても。オレを、なぐつちや、いけねえなア。なんだか、なぐられそうで、行かれねえもの。ちよツと、はなれて、くれませんか」

片彦は、ぬき足、さし足、近づいて、花田を、ゆさぶる。ものゝ二三分もゆさぶつて、ようやく、花田は、目をあけた。

これで、カストリ社事件が終つたのである。

「氣を失つたのは、一分間ぐらいなんだ。ワシは、こゝを必死と、死んだフリをしていたんだ。鼻血のヌルヌル、氣持のわるいこと。うまく行けば、これで助かる、ワシはそう思うと、あらゆる神仏を念じたな」

これが、花田一郎の述懐であつた。

だから、盛夏の今日も、尚、かの社長の先生が机の上のカナダライの水に足をつツこんで天井を睨み、きわめて稀れに、苦痛少き借金のカクトクに街を歩いているのである。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「別冊オール読物」

1948（昭和23）年9月20日発行

初出：「別冊オール読物」

1948（昭和23）年9月20日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力・tatsuki

校正・・noriko saito

2009年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カストリ社事件

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>